学校帰りの石蹴り

小郡市立小郡小学校　六年　石本　稟

キック、トントン。
少しすり減ったスニーカーの先。
キック、トントン。
まだ石蹴りなんてやっている。

ランドセルはもう、私の体に馴染みすぎて、
まるで硬い甲羅のようになってしまった。
高学年、という名前の透明な肩書きが、
最近少しだけ、肩に重い。
委員会活動、一年生のお世話、将来の夢。
全部イヤじゃないのに。
心のおくで、冷たい雨のように感じる。

キック、トントン。
わざと大きく、白線をはみ出してみる。
キック、トントン。
誰も見ていない、私だけの反抗期だ。

すれ違う自転車が
風のように私を追い抜いていく。
あの頃の私は、
もっと世界を広く感じていたっけ。
今の私は、学校の人間関係や、
友達のグループの微妙な温度差を、
なんとなく察してしまうくらいには、
賢くなってしまった。

けれど、この帰り道だけは
誰の視線も気にしなくていい。

電柱の影が、ピアノの鍵盤のように並んで
くつの中がじわじわと熱くなって、
言葉にできないイライラが、溜まる。
すれ違う野良猫の、
まるですべてを見透したような、冷たい目。

歩くことは、確かめること。
歩くことは、手放すこと。
キック、トントン。
友達と別れたあとの、この静けさが好きだ。
キック、トントン。
子供じゃないけど、大人でもない私の、
宙ぶらりんな影が、アスファルトに、
長く伸びる。

家の窓に、ぽつり、ぽつりと灯りがともる。
ただいま、と言う前の、わずかな余白。

キック、トントン。
明日もまた、この足で境界線をまたいで、
キック、トントン。
私は最後の石を強く蹴り出し、
少しだけ大人びた歩幅で、
家へと一歩を踏み出した。